

# 日本語教育における中級に関する一考察 —中級の定義と中級教科書の分類—

桑原 直子

倉敷芸術科学大学留学生別科

(2008年10月1日 受理)

## はじめに

現在出版されている様々な初級教科書において、学習内容にはかなりの共通性がみられる。これは、初級段階においては日本語教育のノウハウが充実し、基本文型や語彙が何であるか、それらをどう機能させるかというシラバスが整い、「初級」が意味するところが絞られてきたからであろう。ところが、中級段階に入ると、そのイメージは大変あいまいであり、全体像が見えにくいのが現状である。既刊の中級教科書においてもレベルや学習内容は多岐に渡っている。本稿では、これまであいまいにされてきた「中級」というレベルとその学習目標を整理、定義し、中級のイメージを鮮明にすることを試みる。そして、日本語教育において多様化する中級レベルの教科書を分類し、その現状を考察する。

## 1. 中級というレベル

「中級」について考えていくにあたり、「中級」の定義が必要であるが、一般的に「中級」というレベルは非常に曖昧に捉えられており、先行文献においても具体的に定義されたものは非常に少ない。また「中級」というレベルがその段階における学習目標をもって語られている場合も少なくない。そこで「中級」というレベルと「中級」における学習目標を整理することで、「中級」の定義づけを試みたい。

### 1.1 先行研究にみる「中級」レベル

『日本語教育辞典』には、まず、学習段階として、入門期を含む基礎的学習の段階と、到達目標に近づいた最終的段階、そしてその中間に両者をつなぐ段階があり、これら3段階にわけられたものを、「初級」「中級」「上級」と呼ぶという記述がある。そして具体的に「中級」という段階については「中級とは、いうまでもなく初級修了の学習者を対象として、上級レベルの学習を可能ならしめる教育」と述べている。しかし「中級」という段階は始まりと終わりではかなりの落差が認められるので、この段階を2分して、初級修了に基づいた目標設定によるものを「中級前期」、上級を射程に置いた目標設定によるものを「中級後期」とすることもあると述べている。

『日本語教育ハンドブック』では、「中・上級」に関する記述の中に、以下のようにくだりがある。「中・上級とは、初級を修了してから日本人と同等のレベルに到達するまで

の段階を指す。「日本人と同等のレベル」という表現があいまいであるように、上級の意味もあいまいであるし、中級と上級の境界線も明瞭ではない。が、一般的には、語彙数 6000 程度、漢字数 1000 程度を提示するまでの段階が中級、それ以上が上級ととらえられている。」

北條 (1981) は、日本語教育でいう学習レベルは、「初級」レベルとは、日常の簡単な挨拶、ひらがな、カタカナ、学習者の身近にある漢字の読み書きができ、基本的な文を使って自らの意図を簡単に表したり、ものごとを説明したりすることができるなど、基本的な事柄を学習する段階であり、「上級」レベルとは、文脈からの類推力、長文を読み取る力、文章表現において適当な語を瞬時に選び出す力、文を文脈に沿って用いる能力、日本人が一般に用いる慣用表現、比喩的表現の意味を理解する能力などが求められるレベルであると述べた上で、「中級」レベルとは、「初級」と「上級」の間にあり規定することはむずかしいが、「会話の中で、待遇表現を用いることができる能力、辞書を使うなどして事前に準備し、時間がかかりかかりながらも、自らの意志を日本語で表現できる能力、論理的にものごとを説明できる能力が求められるレベル」であるとしている。

大木 (1994) では、レベルについて「初級中級上級という言葉は一般に広く用いられているが、その使い方は全く便宜的であり、それぞれの内容は不明瞭である」としながらも、初級と中級との区分として、「話し」「聞く」の「話し言葉」の学習から、「読み」「書き」のための「書き言葉」の学習へと移行するのが大きな区分となるとしている。また中級と上級との区分として「生」の教材が扱えるかどうかということも一つのポイントであるとしている。そしてより細分化した設定として、初級レベルと重複する部分を中心とする「中級前期」と、上級レベルと重複する部分を中心とする「中級後期」の領域分けを提示している。

同じく羽田野 (1990) にも、「中級」という段階の定義、また「中級」で教えるべき教育内容の範囲についてはまだ確定されているとはいえないが、通常、初級段階では「話し言葉」が、中級段階では「書き言葉」が中心となる傾向があるという記述があり、「話し言葉」から「書き言葉」への学習の移行をレベルの区分とする考えがみられる。

その他の「中級」についての先行研究においては、築島他 (1993) にみられる、「中級レベルはそれ自体、大変曖昧に捉えられているのは周知の事実である。(中略) 現在、多くの場合、中級は基礎日本語と専門日本語の「橋渡し」の期間であると捉えられている」という記述、大塚 (1985) にみられる「中級は初級から上級への橋渡しの段階である。初級で習得した現代日本語の基礎を土台に、上級段階での指導に備える段階である。」という記述に代表されるように、非常に曖昧な記述に留まっており、「中級」というレベルの一筋縄ではいかない、その位置づけの難しさを物語っている。

このように、先行研究の中では「中級」と言うレベルは常に「初級」「上級」での学習内容との比較・対照によって語られており、その区分を具体的な学習時間数、語彙数等の

数字を用いて表現しているものは極めて少なく（語彙数や漢字の数はその多くが、学習目標の中で具体的な数字となって表されていることが多い）、多くは、「話し言葉」から「書き言葉」への移行や「論理的にものごとを説明できる能力」など学習者の「能力」を例に取りレベルを区分すること試みている。つまり「中級」というレベルの定義には、このレベルでの学習内容および学習目標が密接に関係しているといえる。

## 1.2 先行研究にみる「中級」の学習目標

『日本語教育辞典』では学習目標について、「初級」を基礎的段階、「上級」を学習の完成段階とした上で、「中級」とはかなり落差のある出発点と到達点をつなぐ段階であり、この落差をうめることが「中級」の学習であると述べてある。また、中級教材と呼ばれるものに収められた漢字の数は、おおよそ1000字から1500字くらいであり、語彙は5000語から7000語くらいであると具体的な数字を挙げながらも、この段階では教科書によって、収められた漢字や語彙にばらつきがあり、取り上げた材料の違いにより出てくる漢字も語彙も異なるため、中級の学習目標を漢字や語彙について、数量的に表すことはできないとし、中級段階での学習目標は、「漢字千何百字、語彙何千何百語といった言語材料のみで表されるのではなくて、そのような言語材料を使ってなされる言語能力の修得」であるとしている。「中級」の学習内容の特徴として中級段階になると教材は読み教材となり、書き言葉中心となることをあげ、具体的に、①叙述体、口語文による文章が多い、②書き下ろし文から生教材に手を入れ学習者用にしたもの、原文のままの文章へと移行する、③漢字の使用もコントロールされたものから原文のままとなる、④既習の文法事項が、総合的に盛り込まれていて、文章も文脈によって理解されるものが多くなることが挙げられている。

北條（1997）は、日本語教育という学習レベルは、「外国人留学生に対する日本語教育カリキュラム策定のための基本的枠組み」（川瀬1986）の中の特に「言語要素」の項目を参考に制定されているとし、そこではそれぞれの到達目標は「初級では、漢字300～400字、語彙1500～2000字、基本的な文型、文法事項、中級では漢字1000字、語彙6000数、表現文型、やや高度の文型、文法事項など、上級では、漢字1500～2000字、語彙8000～10000語、慣用表現など」とされていることを述べている。

築島他（1993）には中級の内容とされているものは一様ではないとしながらも、文章語の語彙、文体の理解、段落の把握などの読解力を中心に育成しているという記述がみられる。

AJALT（1998）では、「中級」の学習目標として、「自然な話し方」「会話における熟達」に向け、機能語、内容語の話題や場面による使い分けの感覚を身につけ、語彙や表現を豊かにし、複文や談話の流れを学習し、まとまった内容が扱えるようにすることを挙げている。

大木（1994）では、「中級前期」での学習目標は、初級の基本文型・使用語彙の復習整

理を基にして、書き言葉を対象に基本的な使用語彙・文型を拡大発展させ技能別の運用能力を高めること、「中級後期」の目標としては、上級レベルの専門分野に向け、実際に使用されているものにより近い教材を網羅的に学習し、理解語彙を拡大させ、応用能力育成を目指すことであるとしている。

以上、先行研究からみえてくる「中級」というレベルをまとめると以下のようになる。

- ・語彙数にして、5000～7000語を習得する
- ・漢字数にして1000～1500字を習得する
- ・教材素材として易しい生教材や書き下ろしの文などの読解を通し「書き言葉」に触れる
- ・自らの意志の表現や論理的な物事の説明ができるようになることを目指す段階である

### 1.3 教科書にみられる「中級」レベルと学習目標

タイトルに「中級」と銘打った、あるいは「中級」という記述がはしがきに見られる18冊の教科書に述べられている「対象者レベル」と「学習目標」を調査した結果、以下のことが明らかになった。

まず、「中級」というレベルについて、時間数では240時間からとするものを最低ラインとし、多数みられるのは300時間から始まるという記述がある。新出語彙については2394語、2400語、2500語、新出漢字については、600字、825字という記述がみられる。学習目標については「実践的会話能力をつける」「社会生活に必要な情報や一般知識が大旨獲得できる」「論理的に相手に正確に伝わるように「話す」「書く」ことができる」など表現の方法は様々であるものの、日本語の運用能力に焦点があてられている。以上のことをまとめると教科書にみられる「中級」レベルとは

- ・時間数にして240～300時間の「初級」課程を終えた時点から200～240時間の学習を終える
- ・新出語彙数にして2400前後を学習する
- ・新出漢字数にして600～800字を学習する
- ・読解力を育成する
- ・習得した文法を正確に運用する力を身につけ、論理的に自分の意見を述べながら、日本人と円滑なコミュニケーションをとることができる能力を育成する期間を指すことができる。

### 1.4 「中級」というレベルと「中級」における学習目標

以上先行研究及び教科書にみられる記述を整理し、「中級」とはどのようなレベルであるのかを考えてきた。その結果、

- ・初級課程240～300時間の学習を終えた時点から、さらに200～300時間の学習を重ね上級課程に進むまでの期間を「中級」という。
- ・語彙数にして5000～7000語（うち新出語彙約2400語）を習得する。

- ・漢字数にして1000～1500字（うち新出漢字約600～800字）を習得する。
- ・「話し言葉」から「書き言葉」へ移行する段階であり、文章体で書かれた教材を通して読解力を育成していく段階である。
- ・論理的に自分の意見を述べながら、日本人と円滑なコミュニケーションをとることができる能力を育成する段階である。

という中級の定義がみえてくる。日本語教育の現場であいまいに語られる「中級」というレベルであるが、以上をもって「中級」という学習段階を表現することが可能であると思われる。

## 2. 中級教科書のタイプと現状

上記で述べた「中級」の定義のもと、ここでは中級教科書について考えていきたい。現在「中級」と銘打った様々な教科書が出版されているが、実際中級レベルにはどのようなタイプの教科書が存在し、出版状況はいかなるものであるのか。ここでは、中級教科書のタイプを考えるとともに、教科書の出版状況を調査、分析することとする。

### 2.1 中級教科書のタイプ

河原崎（1992）は、中級の日本語教科書を型別に分けると、会話を中心としたもの、日本事情の内容を主体としたもの、総合的なもの、作文とか表現の本でありながら、中級の教科書として使えるものという4つが考えられると述べているが、各タイプの具体的な定義については記述がみられない。

AJALT（1998）は総合教科書、技能別教科書、対象者別教科書という3つの型にわけ、総合型教科書とは「対象者の限定が比較的穏やかで複数の技能に着目したもの」、技能別教科書とは「各技能の効率的育成を考えた」ものであるとしている。対象者別教科書については、特に記述は見当たらず、ビジネス関係者向け、技術研修生向け、そして留学生向けの教科書を例としてあげている。

『日本語教材概説』（1992）では、総合型、技能型、対象別・目的別という分類を行っている。目次に載せられた記述からこの分類を詳しく見ていくと、総合型とは一般的に「読む」「聞く」「書く」「話す」という4技能を総合的にのばしていく教材とされているもの、技能型とは、読解・聴解・文章表現・口頭表現という個々の技能に焦点をあてているもの、そして対象別・目的別とは、ビジネス、技術研修生、中国からの帰国者等に焦点を当てているものであることがわかる。

以上をまとめると、対象者の限定が比較的穏やかで複数の技能に着目した教科書、個々の技能を中心に考えている教科書、ビジネス関係者及び技術研修生当「対象」に焦点を当てたもの、あるいは、近年よくみられるようになった、留学生を対象として作成された教科書の中でも、「物理」や「経済」等、大学で専門知識を学ぶという「目的」を中心に作成された教科書というタイプに分類することができるといえる。

ここで、AJALT のいう「技能別」なのか『日本語教材概説』のいう「技能型」なのかという表現の問題であるが、個々の技能に焦点を当て作成された各教科書の総称としては「技能型」と呼ぶほうが適切であると思われる。

これより、教科書をタイプ分けする際には、『日本語教材概説』のいう「総合型」「技能型」「対象別・目的別」という3つの分類が最も適切であると思われる。また具体的に、「総合型」教科書とは「読む」「聞く」「書く」「話す」という複数の技能に着目し、それらの総合的育成を図ることを目的としたタイプの教科書であり、「技能型」教科書とは各技能の効率的育成を考え、「読解」「聴解」など焦点を絞ってその能力を高めていくことを目標とした教科書であると定義することができる。そして「対象別・目的別」教科書とはビジネスや技術研修生といった具体的な対象者を明記し作成されている教科書、あるいは、「物理」「科学」等、具体的に専門性をより高めることを目的と定め作成された教科書であると定義することができる。

## 2.2 中級教科書の現状

『日本語教材リスト 2006～2007』を参考に、教科書を上記で述べた「総合型」「技能型」「対象別・目的別」という3タイプに分類し、中級教科書出版の現状をみてみると、過去30年間で最も多く出版されているのは技能型教科書(51冊)であり、次いで総合型教科書(41冊)、対象別・目的別教科書(28冊)であることがわかる。

また、『日本語教材リスト』にみられる各タイプの教科書の年度別出版数でみると、1987年を境にして中級教科書の出版数は高い伸びをみせている。86年までは、年間2冊程度が出版されるのみ、あるいは全く出版されない年もあったが、87年になると年間7冊の中級教科書が出版され始め、それ以降も平均して5冊程度が毎年出版されている。タイプ別にみると、83年までは出版される教科書は総合型教科書のみであるが、翌84年を境にして技能型教科書の出版が、87年には対象目的別教科書の出版がみられるようになる。教科書の出版に伸びがみられるのは87年以降であり、それ以降、総合型教科書の出版は平均して年間3冊であるに対し、技能型教科書は年により出版される冊数にばらつきがみられ、多い年には7冊もの出版がみられる。中でも、技能型教科書では近年「会話」に重点をおいた教科書の出版が目立ち、教室内で学習者のインターアクションを重視する教育傾向を追うように、年々確実にその数を増やしている。対象目的別教科書も着実に出版数を増やしており、2000年以降は特に高い伸びをみせている。

## 3 中級「総合型」教科書について

既述した3つのタイプの教科書のうち、多くの語学教育機関で、文型や語彙の習得を促すために主教材として用いられるのは主に総合型教科書である。本学留学生別科においても、主教材として『中級へ行こう』や『テーマ別中級から学ぶ日本語』を使用しているのが現状である。この日本語学習の柱として用いられる総合型教科書について、ここではそ

の特徴別にさらに分類をすすめ、詳しくみていきたい。

### 3.1 総合型教科書の内容

現在出版されている「総合型」教科書の中で、例えば『文化中級日本語』は「将来実際の活動ができるようになるための基礎的な技能を積み重ねていく」ことをその目標として挙げ、『新日本語の中級』は「既習の知識を統合し、実社会で役立つ実践的会話能力を身につけ、日本人との豊かなコミュニケーションができる」ことを挙げているように、「総合型」教科書では「読む」「書く」「聞く」「話す」という4技能の一つひとつを段階的に積み重ねながら、最終的にそれらを実社会の中で総合的に機能させることをその目標として編纂されている。

各課の構成からみると、「総合型」教科書では、読解文を中心として、その中から適宜文型を抽出し、それらを練習していく形がとられている。文型練習の他には、本文の内容確認、会話練習、作文等が盛り込まれている。本文の内容について、河原崎(1979)は、その知識・情報は学習者にとって、学習者の知識とかけ離れたものでない「未知のものであること」、また教養的要素のもので、日本で生活するに際して必要な情報でもよいが、「将来役に立つものであること」を挙げているが、「総合型」教科書を見ていくと、その内容は日本社会について書かれたものが多数みられる。世の中に存在する数限りない情報の中から何を選択し、どう配列するかというのは、教科書を作成する上で一つの大きな課題であると思われるが、日本の実社会の中で使用される日本語とともに、背景知識をも習得していくことは学習者にとって必要不可欠であり、それを意図した結果として日本事情的読み物が多く取り上げられているのであろう。

「読む」以外では、聞き取り練習、ロールプレイ、ディベート、速読、調査レポート作成、プレゼンテーションなど、4技能を総合的に伸ばすこと意図した課題が多数みられる。

### 3.2 総合型教科書の下位分類とレベル

既刊の「総合型」教科書を見ていくと、「レベル」という視点からさらに下位分類することができることに気付く。

レベルからみる場合、「総合型」には①初級、中級、上級とシリーズで出版されているもの(以後「シリーズ型」と呼ぶ)、②中級レベルのみ独立して出版されているもの(以後「独立型」)があり、独立型の中には、さらに、中級を一貫してひとつのレベルと捕らえたものと(以後「独立・一貫型」)、初級の復習を兼ねながら、中級を前期・後期にわけて出版されているもの(以後「独立・前後期型」)と分類できる教科書が存在していると考えられる。ここでいう「前後期型」のレベルは、現在は各レベルの橋渡しと言われている「初中級」「中上級」の位置づけと重なる。この分類をもとに、既刊の総合型教科書を調査した結果、初級・中級・上級と3つのレベルを網羅する「シリーズ型」は日本語教科書の出版初期段階から、教育機関中心に作成、出版されていることがわかった。「独立・一貫型」に関しては、ニーズを感じた時々で出版されている模様であった。興味深いのは「独立・

前後期型」の存在で、1995年に『日本語J301』が出版されて以来高い伸びをみせている。これは、以前は初級・中級・上級という3つのレベルでしか捉えられていなかったものが、初級と中級、中級と上級を結ぶレベルも認知されはじめたことを示しているといえよう。

実際に、近年出版された教科書を見ていくと、各教科書の対象者、あるいは日本語学習者のレベルとして「初級」「中級」「上級」という記述の他に、「初中級」「中上級」という記述がみられる。『日本語教材リスト』を見てみると、「学習者レベル別」と題して初級・初中級・中上級・上級の学習者を対象にした教科書が紹介されているが、それによると、過去10年間で「初中級」を対象としたもの72冊、「中上級」を対象としたもの66冊が出版されている。この点からみても、近年では「初中級」「中上級」という段階が認知されてきていることがわかる。また、教科書の対象者としてはみられないものの、学習者の到達度を判定し、実際にクラスを編成する上で、「上級」の上に「超上級」というレベルが設定し始められたのも、近年の一つの動きである。

### おわりに

本稿では「中級」というレベルの定義と、このレベルで用いられる教科書について論じてきた。その結果「中級」とは初級課程240～300時間の学習を終えた時点から、さらに200～300時間の学習を重ね上級課程に進むまでの期間であり、語彙数にして5000～7000語（うち新出語彙約2400語）を、漢字数にして1000～1500字（うち新出漢字約600～800字）を習得するレベルであるということをはっきりとすることができた。また、中級段階では、進学のために新しい文型を身につけていき、文法的意味の理解を深めることと共に、既習の知識を統合しどういった場面でのどのように運用するのかを身につける、実際のコミュニケーション活動に即した指導が目標に掲げられていることも明らかになった。この読解力及び論理的なコミュニケーション力という2大能力の育成という目標については、各々の教師が「中級」レベルの指導やその教材の選択や作成において特に留意しておく必要があると思われる。

中級レベルの教科書の現状調査とその分析からは、教科書は「総合型」「技能型」「対象別・目的別」という3つのタイプに分類でき、総合型に関してはさらに「シリーズ型」「独立型」に下位分類できることを述べた。この分類において、特に総合型教科書の「型」の違い、つまりその特徴の違いを知ることは、教育現場で教師が学習者のニーズにあった教科書を選択する際にひとつの指針となると思われる。具体的には、文型を取り残しなく積み上げていくことができる「シリーズ型」の教科書を選ぶのか、到達目標レベルに焦点を絞って学習していく「独立型」の教科書を用いて初級を復習しながら授業を進めていくのかといったように、シリーズ型であるのか独立型であるのかを、ニーズに合った教科書選択のひとつの目安として考えることができるのではないだろうか。

また、今回は中級の定義づけと中級教科書の調査・分類のみにとどまったが、今後これ

らを基に、更に教材分析を進め、中級教科書にみられる共通点や、中級教科書における不足点を把握するといった課題が残されている。

#### 注

- (1) 本稿中、中級教科書の現状で述べた際のデータは、凡人社発行の『日本語教材リスト2006-2007 no.36』を参考に抽出したものである。
- (2) 教科書にみられる中級レベルを調査した際に参考としたのは以下の教科書である。
  - テーマ別中級から学ぶ日本語 (2003) 研究社
  - 新日本語の中級 (2000) 海外技術者研修協会
  - 日本語中級 I (1992) 東海大学出版会
  - 中級日本語 (1994) 東京外国語大学留学生日本語教育センター
  - 文化中級日本語 I II (1997) 文化外国語専門学校
  - 日本語中級J301 (1995) スリーエーネットワーク
  - 日本語中級J501 (2001) 日本語中級J301
  - 現代日本語コース中級 I II (1990) 名古屋大学総合言語センター日本語学科
  - 進学する人のための日本語中級 (2000) 国際学友会
  - トピックによる日本語総合演習 (2001) スリーエーネットワーク
  - ニューアプローチ中級日本語[基礎編] (2000) 日本語研究社
  - コンテンプラリー日本語中級 (1989) 桜楓社
  - 現代日本語中級総合講座 (1998) アルク
  - AN INTEGRATED APPROACH TO INTERMEDIATE JAPANESE (2008) ジャパンタイムス日本語中級 I II (1990) 凡人社
  - 日本語表現文型中級 (2000) アルク
  - 総合日本語中級 (1987) 凡人社
  - 中級で学ぼう (2007) スリーエーネットワーク

#### 参考文献

- 日本語教育学会 (1990) 『日本語教育辞典』 大修館書店
- 日本語教育学会 (1992) 『日本語教育ハンドブック』 大修館書店
- 河原崎幹夫 他 (1992) 『日本語教材概説』 北星堂書店
- 文化外国語専門学校日本語課程 (1997) 『文化中級日本語 I II』 文化外国語専門学校
- 海外技術者研修協会 (2000) 『新日本語の中級』 スリーエーネットワーク
- AJALT (1998) 「中級教科書の変遷」『AJALT』 No.21 (pp.16-27)
- 大木隆二 (1994) 「中級教材の扱いとその周辺をめぐって」『九州大学留学生センター紀用』 第6号 (pp.41-56)
- 大塚順子 (1985) 「中級初期の表現指導」『講座日本語教育』 第21分冊 (pp.13-36)
- 川本喬 (1981) 「中級段階の内容について」『講座日本語教育』 (pp.37-43)
- 河原崎幹夫 (1979) 「中級日本語教科書について」『日本語教育』 37号 (pp.55-64)
- 河原崎幹夫 (1992) 「特集 日本語教科書の条件」『月間日本語』 7月号 (pp.4-27)
- 北條淳子 (1981) 「中級段階における学習内容―練習問題の作り方―」『講座日本語教育』 第17分冊 (pp.31-43)
- 佐藤豊 (2000) 「日本語中級教科書について」『ICU日本語教育研究センター紀要』 10号 (pp.1-12)
- 羽田野洋子 (1990) 「初級段階から中級段階への移行期の教材」『日本語と日本語教育』 第18号 (pp.13-27)
- 築島史恵他 (1993) 「中級読解教材の文末表現―海外司書日本語研修の土塊教材開発に向けて」『日本語国際センター紀要』 (pp.1-13)

A Study of the Intermediate Level  
in Japanese as a Foreign Language  
— A Definition of the Intermediate Level and a  
Classification of Textbooks in Intermediate Level —

Naoko KUWAHARA

*Course in Japanese Studies for Students from Overseas,  
Kurashiki University of Science and the Arts,  
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*  
(Received October 1, 2008)

Textbooks for the beginners level in Japanese as a foreign language have many features in common as there is a strong consensus for the definition of that level. However, textbooks for the intermediate level have very little in common with one another, making choice of teaching material a challenge for most teachers in the field. The problem lies in the vagueness of existing definitions of the intermediate level.

In this paper, through reviewing a number of articles in the literature, I propose a definition of the intermediate level in Japanese as a foreign language. Furthermore, in accordance to my definition, I classify extant textbooks for that level in order to facilitate the choice of teaching material to suit the needs of the student and aims of the teacher.